

令和5年度 全幼研ワクワクプロジェクト研修会報告

主催 公益社団法人 全国幼児教育研究協会

「教育講演会」

香川支部

○ 実施日 令和 5年 7月 25日(火)
時 間 13時 00分 ~ 15時 10分

○ 演 題 「遊びの中の学びと育ちが豊かになる子どもの理解と環境」

○ 共 催 香 川 県 幼 児 教 育 研 究 会

○ 会 場 公益財団法人香川県教育会館 ミューズホール

○ 講 師 玉川大学教育学部 教育学科 教授
学校法人田澤学園東一の江こども園 園長
田 澤 里 喜 氏

○ 参加者 全幼研会員 58 名、幼児教育関係者 214 名
(計 272 名)

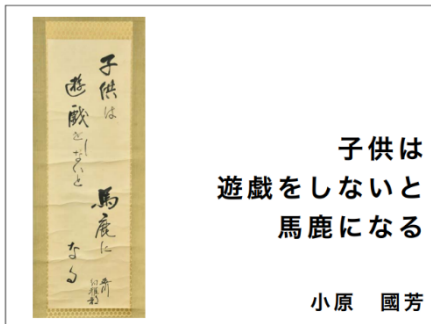
○ 参加呼びかけ 香川県幼児教育研究会、香川県私立幼稚園連盟

○ 内 容

- ・ 令和5年度香川県幼児教育研究会夏季研修会にて実施。
- ・ 令和3年度香川県幼児教育研究会夏季研修会では、田澤先生より『あそびの中で子どもは育つ』と題したご講演を拝聴した。令和3年度は、コロナ禍でオンライン開催となってしまう、会員から再び田澤先生のご講演を拝聴したいという希望が多かったため、2年ぶりに田澤先生にご講演を依頼し、リアル開催で拝聴することができた。
- ・ 香川県幼児教育研究会の令和5年度研究主題は、「一人一人のウェルビーイングを求めて ～確かな子ども理解に基づいた遊びと学びを支える環境構成と援助～」である。この研究主題につながる内容について、田澤先生にご講演を依頼したところ、『遊びの中の学びと育ちが豊かになる子どもの理解と環境』という演題でご講

【田澤先生のご講演より抜粋】

- 子供は遊戯をしないと馬鹿になる



子どもの育ち「学びに向かう力」として、子どもは、とことん遊ぶという遊び込む経験が必要である。そのためには、子どもが指示命令を聞く環境ではなく、提案できる環境になっているか？子どもに決定権・選択権・拒否権があるか？保育者も子どもと一緒に面白がることができるか？ということが大切である。

- 受容的、応答的に行われる保育の重要性

子どもの育ちには、困ったこともプラスのことも受け止めてもらえる「受容」されてきた経験や、自分の思いや意欲を安心して伝えられる環境、いろいろな遊びをしてきた経験等が必要である。指示命令に従う日常からは「やりたい」は生まれにくい。

第2章 1 乳児保育に関わるねらい及び内容

基本的事項

- 視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達
- 特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成される



受容的、応答的に行われる保育の重要性

厚生労働省「保育所保育指針の改定について」

- 遊びの中の学びと育ちが 豊かになる環境の工夫

環境とは

- ・ 物的環境・・・教材、教具、廃材、自然物など
- ・ 人的環境・・・保育者、保護者、地域など
- ・ 空間的環境・・・園庭、保育室、自然環境、雰囲気など
- ・ 時間的環境・・・遊ぶ時間、遊び込む期間など
- ・ 文化的環境・・・園文化、地域文化など

「環境」とは、物的環境・人的環境・空間的（雰囲気）環境・時間的環境・文化的環境の5つの視点で見ていくことが大切である。

「物的環境」・・・本当に子どもがしたいことを理解しようとするのが大切。
例⇒「お店屋さんをやりたい」と言っている子どもたちは、お店屋さんの何をしてたくて言っているのだろう？「いらっしゃいませ！」という言葉のやりとりを楽しみたいのかな？それとも、お店屋さんの商品を作りたいのかな？もしかしたら、お店屋さんのお店を作りたいのかもしれない？など。

子どものやりたいことによって環境構成は変わってくるので、子どものしたいことを理解することが大切になる。

「人的環境」・・・保育者の関わりを考えることが大切。

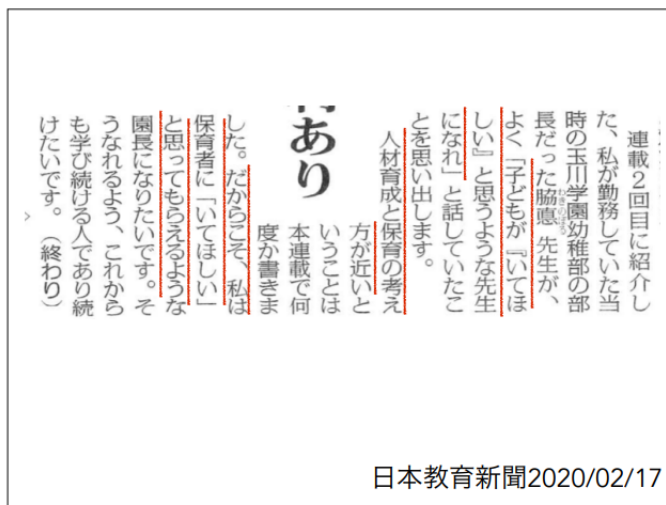
例⇒金八先生のような先生ではなく、ちびまるこちゃんの先生のように、先生は何もしていないようで、実は、子ども同士が意見を出し合いながら自分で解決できるように子どもたちをつないでいる。そんな学級経営が大切。先生は子どもをお世話する人ではない。

「空間的環境」・・・「見える化」の大切さ。ドキュメンテーションの活用。

「時間的環境」・・・「みんなのじかん」は、先生が決めたことをみんなでする一斉活動の時間ではない。「あそびのじかん」と「みんなのじかん」はつながっていて、子どもの興味関心が広がり、遊びが充実するためにどちらも大切な役割をもって行き来している。

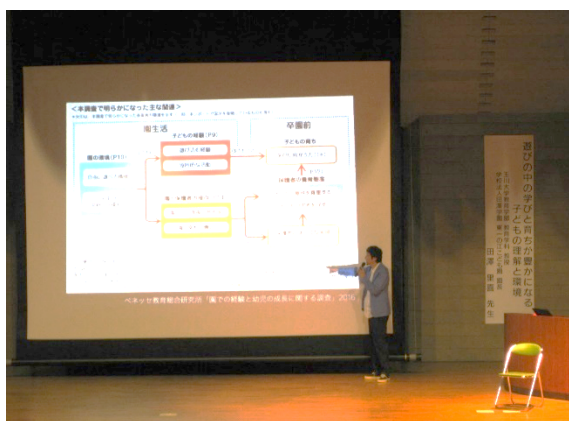
「文化的環境」・・・遊び心を大切にしている先生。面白がっている人が傍にいることは大切。毎年してきた行事だからではなく、教育的価値をしっかりと検討することで、子どもへの働きかけや環境構成が変わってくる。

・ マネジメント≡保育



マネジメントも保育も人の根っこをつくる営みで大切にしていることは同じであること。あなたは子どもにとって「いてほしい人」と思ってもらえるような先生ですか？ 子ども・保護者・保育者にとって、安心できる人・居心地のいい人でありたい。

講演会中の写真



○ 参加者の感想

- 5つの環境に視点をあてた話はとても分かりやすかった。空間的環境では「見える化」することにより様々な効果が期待できることを知った。管理職にとっても、保護者や外部へ発信する際、いかに分かりやすく端的に伝えられるか、意識しながら実践したいと思った。
- 私たちが悩む行事も、教育的価値を十分に検討したり、適切なものを精選したりすること、幼児の負担にならないようにすることを考えて取り組むことで、幼児の生活が主体的に楽しく活動できるものになり、自然と潤いのある活動になることを考えることができた。
- 「一緒になって面白がっている人が側にいることは幸せなこと」という言葉が印象に残った。子どもが安心してしたいことを「したい」と言える関係や雰囲気づくりを大切にしながら子どもとの日々を過ごしていきたい。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保育者自身の今の姿にあてはめてみるという行為は考えたこともなかった。大人もばらつき（凸凹）があって当然であり、子どもも同じで均等に育っていくわけではない。凸凹は個性として捉え、良いところを小学校につなげるという話を聞き、理想像にとらわれすぎなくてもよいと思え気持ちが楽になった。
- 様々な事例を交えながらの講演で、「面白そうだな」「自分の園でもやってみたい」と、聞いていてワクワクした。特にロボットの事例では、「ロボットを作りたい」という子どもの言葉に、先生が絵本の読み聞かせをして、ページのコピーを掲示するなどの環境だけでなく、こっそり動かして動画を撮るなど、とても楽しそうだった。遊びは、先生のやり方によっていくらかでも広がるということが分かった。子どもたちにとって、先生といると楽しい、面白いと思ってもらえるような存在でありたいと改めて感じた。
- 日々の生活の中で、子どもが自分の思いを伝えたり、考えたりする姿があまり見られないと悩んでいたが、それは、私自身の保育が、指示・命令になっていたからだと気付いて反省した。
- 分かりやすい言葉や、身近な事例など、とても理解しやすく、明るくテンポの良い話し方でとても楽しく聞かせていただいた。「先輩保育者の真似をしてみるうちに、段々と自分が出てくる。それは、保育者同士の関係性が良くないと実行しにくいこと」「子どもたちと担任の関係は『金八型』と『ちびまるこちゃん型』があること」「行事でねらいが分からないものは見直し、精選すること」「いてほしいと思ってもらえる先生」など、心に残る話がたくさんあった。
- 日々の保育の中で、保育者として子どもたちに問い掛ける声掛けや、環境を構成していくことで、様々な考えが生まれ新たな気づきへとつながるので、常に意識しながら保育と向き合っていきたいと改めて感じた。また、その中で子どもの姿や育ちを保護者や地域の方に発信し、園の様子を知っていただくことで、互いに子どもたちの成長を共有し合えるように努めていきたい。
- 幼児期の子どもたちにとって、遊びが生きる力を育むためにとても重要であることを改めて学び考えることができた。子どもたちの「やりたい」を実現できるように、日頃から自分の思いや意欲を伝えられるように関わっていきたい。忙しくなってくると、ついつい「待ってね」「後でね」と言ってしまうがちな自分を反省した。忙しくても、子どもと一緒に「面白い」を共有しながら遊びを楽しみ、子どもたちに「いてほしい」と思ってもらえるような保育者になりたい。

○ まとめ（成果と課題）

- 久しぶりのリアル開催となった講演会。参加した先生方からは、オンライン研修にはない、会場や講師の先生の雰囲気、熱量を感じたようでとても好評だった。課題として、こども園等、保育者の働き方が多様化している中、より多くの方に参加してもらえるような方法や時期を探っていく必要があると感じている。

令和5年度 全幼研ワクワクプロジェクト研修会報告書

主催 公益財団法人 全国幼児教育研究協会

運動遊びの保育研修会

全幼研秋田支部

提出日 令和 5年 11月 6日

- 実施日 令和 5年 7月 27日(木)
時 間 13時30分～16時30分
- テーマ 「こどもと遊ぶ 運動遊び」
- 共 催 秋田県放送教育研究協議会
- 会 場 (認)勝平幼稚園 ひよこ保育園ホール
- 参加者 保育士・保育教諭・栄養士 (計 42 名)
- 参加呼びかけ 秋田県内私立幼稚園団体、市内保育協議会団体、大学関係者
秋田市指導主事 他
- 内 容
 - ・実技を主眼とした数年ぶりの、対面形式での研修会を目的とした。
 - ・キャリア・年齢・幼保・職種・立場に関係なく、体を使って笑い声が聞こえる研修会を開催したく、全幼研理事長福井直美先生にご来秋頂き「運動遊び」を主題とした内容で、講演と実技を実施した。
 - ・子どもたちの運動量が、体力や運動能力に大きくかわる。未来を担う子どもたちが心も体も元気に健やかに生きていくため、“基本の基、となる体を使って、頭を使って遊ぶことを学ぶ。
 - ・大地を踏む足を正しく使い、正しく靴を履き、正しく歩くことの重要性を学ぶ。(足育の大切なことを学ぶ)
 - ・保育現場で日常に体を使って遊ぶ内容を、実技を通して学ぶ。自ら・心と体を働かせ、充実感と見通しをもって行動する子どもを育てる保育をしよう。
 - ・体を使っていろいろ遊ぶことで、協同性・道徳性・規範意識が身についていく。具体的な遊びを紹介。ワクワクする環境構成を考えよう。
 - ・〔まとめ〕運動遊びはワクワクドキドキ、多様な動きを工夫して、満足と自信と意欲へ子どもたちを導こう。健康な心と体が育つ。
- まとめ(成果と課題)
 - ・例年開催している秋田支部の令和5年度保育者研修会を、上記の通り開催。
 - ・これまでコロナ感染拡大で対面の研修会を避けてきたが、今年こそは互いに集まり実技の研修の場としたく計画。福井理事長にご来秋をいただきキャリア、立場に関わらず多くの子どもと関わる方々に参加を呼び掛けた。
 - ・今夏は特に暑く、その中で体を動かし汗を流し集まった先生たちと久々に笑い声の中で安心した関係の中での研修を受けた時間であった。

- ・実技研修の中で、グループで工夫し、協力しながら違った動きや工夫した動きを互いが学ぶことで、子どもたちの前で動きや工夫の違いを捉えて、認めて褒めてやる保育士であることを学ぶ。
- ・秋田支部の狙いとして、先生たちが体を動かす遊びがどうしてもここ数年少なくて感じ、講師の福井直美先生には「すぐに遊べる・すぐに応用できる」運動遊びを取り入れていただいた。秋田県に提出するキャリアアップ研修レポートには、「靴のサイズや履き方を保育で考えたことがなかった。」「すぐに遊んでみる。」「工夫してクラスでやってみる。」という声がたくさんあった。

○保育研修会記録写真より



〔講義の様子Ⅰ〕



〔講義の様子Ⅱ〕



まずは 準備体操



新聞紙を丸めて なべなべそこぬけ～



あれれ～ 4人でやったら
元にもどれない！
がんばれ～



新聞紙を使って、ジャンプ



さて、これから何をするのかな？
相手のチームの棒を取りに行くぞ！
がんばるぞー



相手チームからこんなにとったぞー
わくわく やったー！！

小学校でやった
雑巾がけ…。
キツイ！！



風船と相手に気を配りながら
移動していきます。思いやり〜



- ・子どもたちに、ワクワクドキドキする運動遊びの環境を保育者が整えてやりましょう。
- ・多様な動きを意図的に積み重ねる保育をすることで子どもの体力も運動能力もおのずと高まる。
- ・自分でできた喜び、満足が自信につながり次の意欲となる。
- ・これから生きる子どもたちが、健康な心と体でウェルビーイングとなるように育てましょう。

令和5年度 全幼研ワクワクプロジェクト研修会報告
主催 公益社団法人 全国幼児教育研究協会

「幼児期の育ちと学びがつながる『架け橋』のために」

兵庫支部

- 実施日 令和 5年 8月 17日 (木)
時 間 14時30分～16時20分
- 会 場 宝塚市立中央公民館ホール
- 共 催 兵庫県国公立幼稚園・こども園教育研究会 東支部
- 参加者 幼稚園教諭・保育士・教育委員会指導主事(計159名)
- 講 師 鳴門教育大学大学院 教授 佐々木 晃 氏

○ 内 容

1 幼児期の教育とは何か？

- ・学校教育法が根拠となり、幼稚園教育の目的が示されている。
- ・幼児期の教育とは、教科書のない教育であり、小学校以降の子どもの心身の育ちを支える大切なものである。子どもが様々なものに関わり、体験を基にそのものの本質や意味、概念と出会い学んでいく教育である。

2 専門家としての保育者

- ・保育とは『保』＝カウンセリング、『育』＝ガイダンスがベストマッチしている素晴らしいものである。また、①理解する ②共感する ③かかわる ④環境構成 ⑤モデルになる の5本の柱が存在している。保育者は5本の柱の中で自分に何ができるかを考えていく。
- ・環境の構成は、物の「準備」や「設置」ではない。教師の願いや思い、人間性や言葉、立ち振る舞い等々、多様な要素を含めて「構成」という。子どもは教師が支えることで、意欲を高め、次にやろうとする気持ちへとつながっていく。保育者は、子どもの様子を見ながらフィットするように環境を修正、再構成していかなければならない。子どもの夢や希望を叶えるのが保育である。

3 33法令の改定のポイント

- ・50年後の未来を見据え、どんな子どもを育てていくのか。近い将来、社会の在り方そのものが大きく変化している可能性がある。厳しい挑戦の時代を乗り越え未来を切り拓いていく力をもった子どもたちを育てていくために、特に学ぶことと社会とのつながりをポイントとして意識した改訂となっている。私たちは教育の一番走者であり、国民教育としての責任がある。

4 すごいぞ 日本の幼児教育

- ・ジェームズ・J・ヘックマン博士「幼児教育の経済学」は、それまで科学的に研究した物がなかった中で幼児教育改革のベースになっている理論である。日本の幼児教育の心意欲・態度の非認知能力（幼稚園教育要領等では「学びに向かう力・人間性」）を育てる実践は最先端である。
- ・「遊び」が豊かになると「学び」も豊かになる。保育者は、遊びを通して子どもを育てている。「遊び」はごちそうで「学び」は栄養である。おいしい「ごちそう」をいかにつくるかが保育者の腕である。

5 カリキュラム・マネジメントのために

- ・事例を書くことで、保育者の子どもを見る目、保育を展開する力が育っていく。物語として事例を書くことは、日本の幼児教育の文化である。
- ・元々ある指導計画をバージョンアップするように見直しを行っていくとよい。
- ・接続期のカリキュラム作成にあたり、幼稚園では生活の学習化、小学校では学習の生活化に取り組んでいるというそれぞれの独自性を理解し、リスペクトした上でつなげていくことを考えていく。また、自園での取り組みを振り返りそれを小学校へつなげていくという保育者の視点が大切である。

〇まとめ（成果と課題）

- ・具体的な事例を交えながら、幼児期の教育と小学校以降の教育の特性の違いを踏まえた上で、幼児期に育てていかなければならない力について改めて学ぶことができた。その中で、私たち保育者一人一人が、自身の保育について振り返ると共に、幼児教育の中で担う役割の重要性について改めて感じる事ができた。
- ・今回の講演内容から、幼児教育施設の会員だけではなく可能であれば小学校教諭等へも参加を呼びかけ、同じ場で共に研修を深める機会を設けたい。



令和5年度 全幼研ワクワクプロジェクト研修会報告
全幼研近畿地区研修会報告
主催 公益社団法人 全国幼児教育研究協会

「保育の質の向上を求めて

～子どもを見る目 学びを捉える感性 保育をつくりだす力～
滋賀支部

- 実施日 令和5年 9月 20日 (水)
時 間 12時 25分 ～ 16時 30分
- 会 場 大津市立平野幼稚園
- 参加者 全幼研会員及幼児教育・保育関係者 (計 76 名)
- 講 師 びわこ学院大学 教育福祉学部 子ども学科・教授
中井 清津子 氏
- 内 容
- | | |
|-------------|--|
| 12:10-12:25 | 受付 |
| 12:25-12:30 | 日程説明 |
| 12:30-13:30 | 公開保育 保育参観 |
| 13:30-13:50 | 移動および記録整理 |
| 13:50-14:30 | 園の取り組み・学年別グループ協議 |
| 14:30-14:35 | 全体会・開会挨拶 |
| 14:35-16:25 | 講話
「保育の質の向上を求めて」
～子どもを見る眼 学びを捉える感性 保育を創り出す力～
講師 びわこ学院大学 教育福祉学部 子ども学科
教授 中井清津子氏 |
| 16:25-16:30 | 閉会挨拶 |

公開保育 保育参観 記録整理

- ・参加者には、公開保育園の園内研修テーマ「子どもも先生も主体的に取り組み、笑顔輝く保育を目指して」の視点にそった、「本日の指導案」(図1)「記録用紙」(図2)を配布する。参加者は参観したい学年を決め、その学年を中心に参観する。
- ・参加者は、「子ども・教師の姿(行動・言葉・目線・表情・周囲の様子)」「その姿の要因(環境・援助)」の視点で記録を整理する。

保育指導案 9月20日（水）3年保育5歳児 にじ組 18名（男児10名 女児8名） 指導者 藤 香穂			
ねらい	・やりたいたい思いや目的をもち、繰り返し取り組む。 ・友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思いが伝わる喜びを感じる。	内容	・身体動かして遊ぶ楽しさや自分の力の平反えや達成感に喜ぶこと。 ・友達の思いに刺激を受けてみるように。 ・教師に支えられながら、自分の得意な言葉や思いを伝えようとする。
一日の流れ	◎活動 台歌劇の鑑賞・経験してほい！内容 点検 ◎鑑賞		
12:30	身体を動かして遊ぶ ・自ら動きだして遊ぶ ・グループで遊ぶ ・本物のする ・つっこぶ遊ぶ （両手開）	①身体を動かして遊ぶ いろいろな身体のかき回し方を経験しながら、自分のかき回し方を友達に伝える。 ②自分や友達の思いや目的を伝えようとする。身体のかきのつぎつぎと、よりよい身体のかき回し方できるようにして欲しい。 ③自分や友達と技や遊び方を友達に教わってもらい、一緒に遊ぶ楽しさを体験して欲しい。 ④自分かき回し方についていろいろな言葉で思いや目的を伝えようとする。	①グループで遊ぶ ②自分や友達の思いや目的を伝えようとする。身体のかきのつぎつぎと、よりよい身体のかき回し方できるようにして欲しい。 ③自分や友達と技や遊び方を友達に教わってもらい、一緒に遊ぶ楽しさを体験して欲しい。 ④自分かき回し方についていろいろな言葉で思いや目的を伝えようとする。
13:10	片付けをする 水分配給をする	⑤自分かき回し方を見てもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑥自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑦自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	⑤自分かき回し方を見てもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑥自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑦自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
13:30	遊びの振り返りをする 帰りの用意をする	⑧運動会が終わったあとの感想や楽しさを友達に伝える。 ⑨自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑩自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	⑧運動会が終わったあとの感想や楽しさを友達に伝える。 ⑨自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑩自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
14:00	帰る	⑪自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑫自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	⑪自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑫自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
14:30	帰る	⑬自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑭自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	⑬自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑭自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
15:00	帰る	⑮自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑯自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	⑮自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑯自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
15:30	帰る	⑰自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑱自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	⑰自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑱自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
16:00	帰る	⑲自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑳自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	⑲自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ⑳自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
16:30	帰る	㉑自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉒自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㉑自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉒自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
17:00	帰る	㉓自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉔自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㉓自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉔自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
17:30	帰る	㉕自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉖自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㉕自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉖自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
18:00	帰る	㉗自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉘自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㉗自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉘自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
18:30	帰る	㉙自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉚自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㉙自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉚自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
19:00	帰る	㉛自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉜自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㉛自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉜自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
19:30	帰る	㉝自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉞自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㉝自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㉞自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
20:00	帰る	㉟自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊱自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㉟自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊱自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
20:30	帰る	㊲自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊳自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㊲自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊳自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
21:00	帰る	㊴自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊵自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㊴自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊵自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
21:30	帰る	㊶自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊷自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㊶自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊷自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
22:00	帰る	㊸自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊹自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㊸自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊹自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
22:30	帰る	㊺自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊻自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㊺自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊻自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
23:00	帰る	㊼自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊽自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㊼自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊽自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
23:30	帰る	㊾自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊿自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㊾自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊿自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。
24:00	帰る	㊿自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊿自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。	㊿自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。 ㊿自分かき回し方でもうひとつ自分で考えて欲しい。

全道幼児教育研究協議会 近畿地区研修会（平野町権園） 記録		令和5年9月20日（水）	
3年保育5歳児 に組			
本日の保育の中で 予想される主体的な姿	・自分の願いや目的をもち、繰り返し取り組む姿 ・どうしたらうまくいくか考えた、試したりする姿 ・感じたこと思ったことを友達や教師に伝えようとする姿		
その姿を引き出すために 意図した環境	・友達がしていることを見たり、取り入れたりできるように距離感に配慮した場 ・必要に応じてつくったり、繰り返し試したりできる様々な大きさ・長さの違う棒や材料を用意しておく		
その姿を引き出すために 意図した援助	・実現できる方法を一緒に考えた、子どもの気持ち待たずする。 ・その子なりの「達成感」を感じられるような言葉掛けをする。		
記録者： 市川（ ） エピソードの場面（ ）		氏名（ ） その姿の要因 △環境 ○援助	
子ども・教師の姿（行動・言葉・目線・表情） 西の様子（状況）			

(図 1 指導案)

(図2 記録用紙)



(図3 公開園園内研修の取り組み概要)

園の取り組み・学年別グループ協議

- 令和5年度 平野幼稚園 園内研修

子ども先生も主体的に取り組み、笑顔輝く保育を目指して
～①ひとりひとりが ②みんながが ③だててみんながでやってみよう！～

主体的な学びってどんな学び？？主体的な学びを引き出す環境や関係って？？ (仮説)

＜環境＞

 - ①人や環境に自ら関わる。
 - ②教師にいたいこと、欲しいものを伝える。
 - ③ちょっと難しいことも挑戦してよくとる。
 - ④目的をもって積極的に取り組む。

＜教材＞

 - ①興味や好奇心に触れて意欲を引き出す。
 - ②自分なりにやってみようとする。
 - ③自らやってみようとする。

＜関係＞

 - ①「関係性」
 - ②自分の思いを伝える。
 - ③友達との約束を守る、やってみようとする。
 - ④友達との思いや欲求を受け入れる。
 - ⑤共通の目的に向かって、相談、分担、協力しながら達成感を味わう。

＜実践＞

 - ①「試行錯誤」
 - ②結果に感じたり、不思議に思ったりする。
 - ③変化を望むように思い、繰り返す。
 - ④どうしたらうまくいくか考え、試す。

＜環境＞

 - ①「要求性」
 - ②面白い課題にしたいことを、遊び結果を求め繰り返す。
 - ③予想を立てて行動し、繰り返し楽しむ。
 - ④必要物や欲しいものを自分で工夫してつくり出したり、自分で遊びを拡張したりする。

＜教材＞

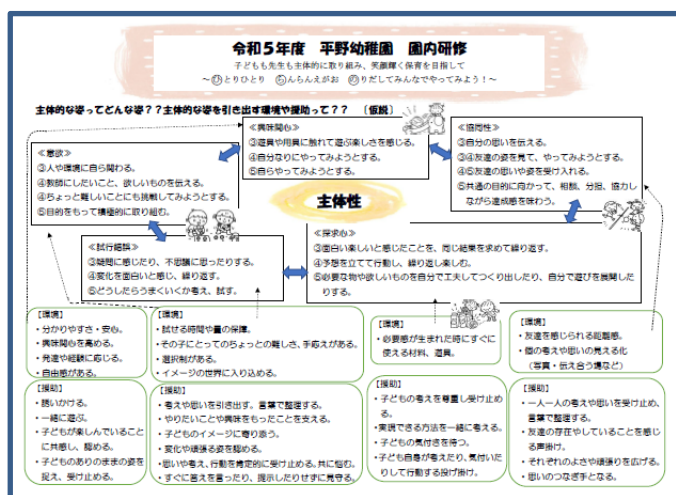
 - ①「環境」
 - ②必要物が生まれだすに際してに使える材料、道具。

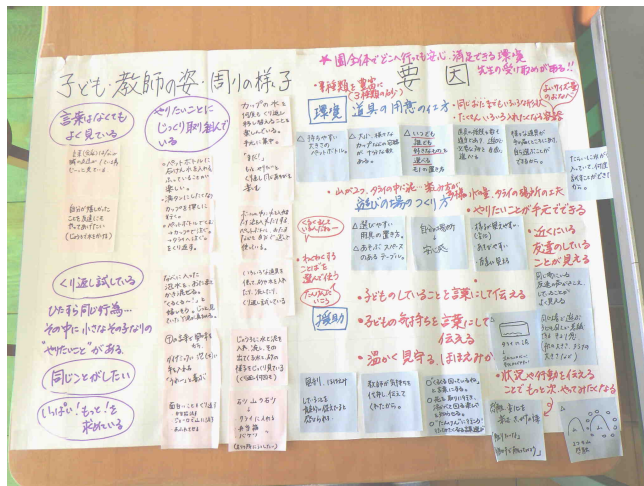
＜関係＞

 - ①「環境」
 - ②友達と見られる経験。
 - ③他の考えや思いの見える化 (書き・話し合うなど)

＜実践＞

 - ①「環境」
 - ②一人一人の考えや思いを受け止める。
 - ③「関係」
 - ④「実践」
 - ⑤「関係」
 - ⑥「実践」
 - ⑦「関係」
 - ⑧「実践」
 - ⑨「関係」
 - ⑩「実践」
 - ⑪「関係」
 - ⑫「実践」
 - ⑬「関係」
 - ⑭「実践」
 - ⑮「関係」
 - ⑯「実践」
 - ⑰「関係」
 - ⑱「実践」
 - ⑲「関係」
 - ⑳「実践」
 - ㉑「関係」
 - ㉒「実践」
 - ㉓「関係」
 - ㉔「実践」
 - ㉕「関係」
 - ㉖「実践」
 - ㉗「関係」
 - ㉘「実践」
 - ㉙「関係」
 - ㉚「実践」
 - ㉛「関係」
 - ㉜「実践」
 - ㉝「関係」
 - ㉞「実践」
 - ㉟「関係」
 - ㊱「実践」
 - ㊲「関係」
 - ㊳「実践」
 - ㊴「関係」
 - ㊵「実践」
 - ㊶「関係」
 - ㊷「実践」
 - ㊸「関係」
 - ㊹「実践」
 - ㊺「関係」
 - ㊻「実践」
 - ㊼「関係」
 - ㊽「実践」
 - ㊾「関係」
 - ㊿「実践」

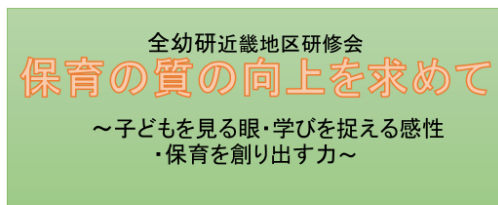




【保育参観・学年グループ別協議から学んだこと（参加社アンケートより）】

- ・ 幼児の「やりたい。」「やってみよう。」の声を大切にしたいと思える環境づくり、教師の関わりが学べた。
- ・ 組織的に育ちを考える環境を構成されていることが分かった。
- ・ 安全面の確保という難しさはあるが、幼児が自由に意欲的に遊ぶ姿が印象的であった。教師が多くを発することなく、幼児の考えややり取りを見守っている様子も大事だと思った。
- ・ 運動遊びについて3年間研究をされてただけあり、環境が工夫されて、幼児の心が動き、自ら遊び込む姿がたくさんあった。
- ・ 同じ保育を見て、語り合う時間が大切だと改めて感じた。

講話・びわこ学院大学教育福祉学部子ども学科 教授 中井 清津子 先生



びわこ学院大学
教育福祉学部 子ども学科
中井 清津子

保育の質の諸側面 (OECD 2006)

質の側面	内 容
・ 志向性の質	政府や自治体が見守る方向性
・ 構造の質	物的・人的環境の全体的な構造
・ 教育の概念と実践	教育(保育)の概念や実践
・ 相互作用あるいはプロセスの質	保育者と子どもたち、子どもたち同士 保育者の関係性(相互作用)
・ 実施運営の質	現場のニーズへの対応、質の向上、効果的なチーム形成等のための運営
・ 子どもの成果の質あるいはパフォーマンスの基準	現在の、そして未来の子どもたちの幸せ につながる成果 (well-being)

保育の質とは=学びの過程の質

- ・ 何をしたのか、何が出来たのかより
(成果主義 体験主義ではなく)
- ・ 環境に関わりながら、何を感じ、何に苦勞し、どのように考え、誰と、どのようにして自分(自分たち)の思いが実現できたのか
(主体的・対話的・深い学びから自信へ)
関係論的な見方、大事な経験の保障
- ・ その結果、おそらくその子の将来に〇〇の影響を及ぼすだろう
(未来への期待・子どもの幸せ)

2 学びの過程を捉える感性とは、

(1) 子ども目線から考える(子どもをみる眼)

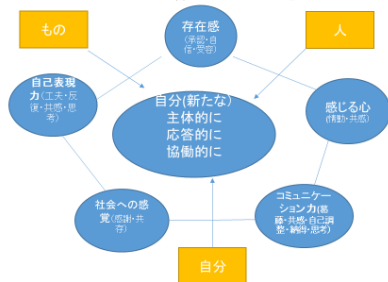
モザイク・アプローチ(ヨーロッパ圏を中心に広がる)

子どもの参加のツールとして、カメラや描画を使用
子どもが撮ったものや描いたものをインタビューし、子どもの思いやイメージを解釈し共有していく。(好きな遊びや場など)

「子どもは生活の主体者である」
「子どもは受け身の存在」ではなく「今を生きている存在」
イタリアのレッジョ・エミリアの「聴くことの教育」の影響

(4) 関係性を創り出す姿を支える

(関係性を創り出す力の育ちへの構造図)



4 学びの過程を豊かにする保育者の役割 (保育を創り出す力)

- ・(1) 環境としての場・空間との対話

空間の質と学びの質

対話

心が揺れる

関係性を創る

- (2) 子どもの心の動きに付き合い、対話し、新たな方向性を一緒に考える保育者 (学びを捉える感性・保育を創り出す力)

子どもの心の揺れを傾聴

付き合い・理解し・対話し

新たな価値を見出す

最後に

人間は、地球において様々な環境と相互作用をしながら、生きているというか、生かされているというか、・・・共に生きていると考える。

赤ちゃんは生まれたときから、身近な物に関わり、お世話をしてくれている人に関わり、自分にも関わり自己と相手との関係を紡いでいると思うと、この関係性の中で生き・生かされていることを意識しながら、人間の基本的な力を、より豊かに伸ばしたいと考える。ローリス・マラグッチは、「創造的な教師は二つのポケットが必要。一つは不確かな問いを入れるポケット。もう一つは確かな知識を入れるポケット」と述べている。

保育の質を考える時、環境への関わりを通して、物の価値に心を動かかし、人々と協働するプロセスに価値を見出せる新たな挑戦や試みが必要である。子どもから学び、保育のありように新たな視点を持つことにより保育の質は持続可能なものとなるだろう。

常に、子どもの声に耳を傾け、自らの感性を研ぎすまし、子ども共に保育を創り出す保育者でありたい。



【講演より学んだこと (参加者アンケートより)】

- ・実践事例を交えながら、幼児の素顔を見逃さず、立ち止まり、幼児と共に対話しながらつくり出す保育について深く学ぶことができた。
- ・保育の中でどこに価値を見出すかという話が印象的であった。幼児にしたいことや考えていることを引き出し、考えさせたいことを伝えながらどこに価値を見出すか大切にして、保育をしていきたい。
- ・「問いをもつ。」「価値を見出す。」教師の課題である。心を動かして向き合っていきたいと改めて思った。

- ・ 幼児と共に同じ目線で楽しみ、悩み、揺らぐ教師の姿勢に保育の質の向上が繋がっていることを感じた。
- ・ 幼児の心の動きに向き合い、対話し、新たな方向性を一緒に考えられる保育者でありたい。若い先生方に古い価値観を押し付けず、共に考えていきたい。
- ・ 幼児の目線で見ることができる教師になりたいと感じた。
- ・ 「まずはやってみよう。」の言葉に気持ちが動いた。まずはやってみて先生たちと悩むことに価値を見出していきたい。

〇まとめ

（成果）

- ・ 「保育を伴う研修会」の価値

滋賀支部では、毎年2回研修会を開催している。1回は今日的な課題としての内容であり、近年は特別支援教育や音楽実技・版画実技などを開催している。さらに「保育を伴う研修会」を開催している。15年近く毎年何かの研究会に重なることなく、全幼研としての独自の研修会として位置付けている。保育を参観し、保育について語り合うことにより人の保育ではなく自分事としてとらえ、深く考えるようになるのではないかと考え続けている。コロナ禍の中でも、参観人数を限定し、オンデマンドで発信しながらやり続けることができた。このことは、全幼研滋賀支部の誇りでもある。会場や保育を提供していただく園長先生・先生方に心から感謝をしている。

滋賀支部は、県全体の園数から考えても全幼研の会員が多く、熱心に取り組んでいる県である。だからこそ、経験の浅い先生方が保育の楽しみや喜びが感じられるように学び合う機会が必要であると考え保育の質の向上につなげたいと考えている。参加者からも大変参考になるので、「保育を伴う研修会」は継続してほしいとの意見が多く寄せられている。保育を公開していただく積極的な園もあり、学び合いたい気風があるのは全幼研滋賀支部として今後も継続していきたい。

- ・ 多様な考え方に触れる喜び

経験1年目から15年目ぐらいの日々保育に関わっている担任の参加者が多い。参観の仕方もあるその園の園内研究のテーマに基づき、記録を採りながら視点をもって保育を参観するようにしている。グループ協議はKJ法を用いて子どもの姿の読み取りや内面理解を深め、指導方法である環境や援助の在り方について学びを深めていくようにしていることは、多様な考え方につながる研修ができていると考えられる。

- ・ 公開園として多くの先生方の意見が聞ける喜び

公開園の園内研究のテーマに合わせて協議を進められるので、多くの意見や考え方や具体的な指導方法を知る機会になる。日頃は新しい発想など取り入れる努力はしているが、職員数が少なく苦労をしているが、多くの園の先生方との話し合いにより新しい発想を取り入れる機会になるので、園の活性化につながる。

- ・ 理論と実践をつなぐ講演

講師の中井先生の講演の中で、当日の保育の場面を交えての内容であったので、理論と結び付けて学ぶことができた。常に自分の中で講演でも話されていた「不確かな問いを入れるポケット」

「確かな知識を入れるポケット」を持ち続けることが子どもと共保育を創り出す保育者になれるよう頑張りたいなどの声が寄せられている。公開保育をしている園と参加者が共に考え、学び合うことができる研究会になるようにしたい。

（課題）

- 滋賀支部理事が中心になって運営、グループ協議進行などを行ったが、人材育成の視点からも、中堅キャリアの会員にも、運営補助を依頼してもよいと感じた。
- 多くの参加者を受け入れて行いたいと思っているが、参加者の見分けができるような、危機管理への対応策や、体制作りも必要であると感じた。

令和5年度 全幼研ワクワクプロジェクト研修会報告
主催 公益社団法人 全国幼児教育研究協会

「コロナ禍を経験した今だからこそ、子どもの食育を考える」

群馬支部

- 実施日 令和 6 年 1 月 6 日（土）
時 間 13時00分～14時30分
- テーマ 「食べることで子どもは育つ！」
- 会 場 ZOOM開催 サテライト会場：共愛学園前橋国際大学短期大学部
- 講 師 上越教育大学大学院 教授 野口 孝則 氏
- 参加者 幼稚園教諭・保育教諭・小学校教諭・行政関係者・養成校職員
（計13名）
- 参加呼びかけ 群馬県内国公立幼稚園・こども園・保育所関係者、大学関係者、行政関係者、小学校関係者、養成校学生
- 全幼研ワクワクプロジェクト研修会開催の経緯
 - ・群馬支部では、支部会員の参加のしやすさを考慮し、令和4年度より、多忙な労働環境の中でも、会員が気軽に参加できる研修の機会を模索し、「ちょこっと研修」として研修会を企画し、開催している。今回の研修も群馬支部のこの方針に基づいて企画したものである。

＜令和5年度に「ちょこっと研修」として開催した研修＞

- 第1回 「個に応じた指導とクラスづくり」
(7月28日 15:00～16:00) 会場：前橋市立大胡幼稚園
- 第2回 「保育者の魅力を高める働き方改革を！」
(11月23日 14:00～15:00) 会場：伊勢崎市立第一幼稚園
- 第3回 「食べることで子どもは育つ！」
(1月6日 13:00～14:30) ZOOM 開催

- ・本研修は、今年度最後の「ちょこっと研修」となることから、外部講師を招聘し、コロナ禍による影響を強く受けてきた子どもの食育について再考するための研修会として企画した。

○ 内 容

- ・コロナ禍において食事のスタイルの変化や制限など余儀なくされてきた。今一度、子どもにとっての食事とは何かを考え、園内での食事の役割について考える。



様々な制限をかけてしまうと、解除が難しくなりますよね。
行政や系列園が作成した献立を共有する場合は、なかなか園独自の給食にできない難しさがありますね。

- ・食育とはイベントをするのではなく、毎日の食事を通して「食べ方」を学ぶことである。



食育では、食品名や栄養などのほか、食べ方を学ぶことが大事です。
例えば、子どもが喉に詰まらせる事故を防止する観点から、ミニトマトを給食で出さないようにすれば、給食での事故はなくなります。でも、ミニトマトの食べ方を学ぶことができません。園で育てているミニトマトを子どもが内緒で食べてしまったり、食べ方を教えてもらっていない家庭などでミニトマトを食べる機会があったりしたら、事故はなりません。
園で事故が起きないようにすることは大切ですが、根本的には、食べ方を教えなければ事故はなりません。

- ・食育基本法（2005 年）によると、「食育は、食に関する適切な判断力を養い、生涯にわたって健全な食生活を実現することにより、国民の心身の健康の増進と豊かな人間形成に資することを旨として、行われなければならない。」（第二条）とある。



コロナ禍では、共食が感染源と言われてしまいましたが、共食は、体を育てるだけでなく、心も育てるもので、癒やしや元気、頑張りを生み出します。

- ・食材と調理法、食器、食具の組み合わせが適切であるかも、子どもの食べやすさや残食量を減らすことにつながる。



人参好きの子どもたちの残食量がとても多いことがありました。栄養士が食事の様子を見に行くと、短冊切りの人参が平皿に盛られ、スプーンを使って、子どもにはとても食べにくい状況だと気付きました。次の時、茶碗のような縁のある皿に変えて出したところ、まったく残食はありませんでした。
献立作成や調理の専門家、保育の専門家などがそれぞれの知識や知恵を合わせることで、子どもの負担が減ることはたくさんあります。

- ・『子どもが食べたい気持ちなる情報』を言葉で伝えると、食べたい、食べてみたいという気持ちが生まれる。



食事に関する言葉や食事中にかける言葉は、とても大切です。
例えば、野菜サラダよりも、「シャキシャキ野菜サラダ」の方が、おいしそうに聞こえます。また、さつまいものおやつよりも「年長のお兄さん、お姉さんが掘ってきてくれたさつまいものおやつ」の方が、食材への関心が高まります。

- ・0・1・2 歳児は、いろいろな食材との出会いが偏食予防となる。



イヤイヤ期こそ、給食室と保育者が情報を共有し、連携して、給食メニューのおいしさを高める言葉を使うことが大切です。

- ・子どもの食事量は、午前中の過ごし方で変わる。以前は、たくさん食べるのがよい子のように言われていたが、貧困などの理由で朝食を食べてこないために、昼食量の多い子どももいることにも留意する必要がある。



午前中の活動を工夫して、お腹のすくりズムのもてる子にしていきたいです。例えば、昼食までの間の時間で、「今日のお昼ご飯は何だろう？」と投げかけてみるのも一つの方法です。また、先生がおいしん坊役をするのも、子どもの食べたいものや好きな物が増えるきっかけになります。

- ・園では食事を提供するのであって、栄養補給をさせているわけではない。子どもにとっての“ふつう”や“当たり前”を家庭に伝えていく使命も担っている。



食事は、大人の都合で提供したり、強制したりするものではないはずです。一人一人食べる量が違う子どもたちに、同じ量での提供がふさわしいとも限りません。また、担任が替わると偏食や完食に関する対応が変わるといのも、子どもたちにとっては、迷いや負担になります。

園では、保護者とは異なる“プロ”の有資格者として食育を進めたいですね。また、現代の家庭環境の変化を捉え、どのように家庭での食育を進めていくかをアドバイスすることも求められています。さらに、子どもに人気のメニューの作り方などを動画配信などにより、保護者に知らせるなども積極的に取り入れるとよいと思います。

- ・家庭だからこそできる食育もある。



冷蔵庫から麦茶を出したら、残りを冷蔵庫に戻して、コップに注いだ麦茶を飲む、バーベキューで肉を焼くなども立派な食育です。飲食に興味をもったり、食品の扱い方や調理方法、衛生管理などについて知ったりすることも大事な食育なのです。

☆偏食予防のコツ伝授

- ・3～5 歳頃は味覚が大人より鋭い。強い味に触れるほど味覚は鈍くなる。
- ・ピーマンなどはよくゆでると苦みがなくなる。



偏食予防のコツは、よくゆでて、味付けは薄味にすることです。味覚の鋭い子どもに、大人味で出すから食べないのです。濃い味でごまかすより、薄味にした方が子どもには食べやすくなります。

野口先生への質問コーナー



調理業務では衛生面への配慮は外せないところですが、給食室と子どもたちとの距離をもっと縮めたいと考えています。参考になる好事例を教えてください。

子どもたちの好みや年齢、発達に応じた調理の工夫を、栄養士や調理員が子どもたちに伝えるといいと思います。調理担当者が、直接子どもたちに伝えるということが大事です。例えば、「ピーマンはいつもより小さく切っているから食べやすいよ」と子どもに声をかけるなど。

また、食材を調理室へ運ぼうということで、園に届いた食材をバケツリレー方式で給食室に届けるなども、子どもたちにとってはお手伝いしているという気持ちをもてます。そこでいろいろな食材に触れることで、食材の違いに気付くことにもつながります。例えば、キャベツとレタスと白菜の違いなど。



年齢に応じた量があるので、適正な一食分を食べられるようになってほしいと思うのですが・・・

必要提供量として示されているのは、国の平均値です。園の子どもたちに合っているかは、その園で考えることになります。また、園で決めた量も3カ月くらいで見直すことが大切です。100%の喫食が大事なのではなく、園の子どもたちにとって満足できる量であるかが重要なのです。園の子どもたちにとっての必要提供量になっているかは、身長・体重の成長曲線で判断すれば大丈夫です。

よそった後で減らすのは好ましくありません。配膳の段階で大盛り・中盛り・小盛りを作っておき、子どもたちに選ばせるとよいです。自分のお腹の具合で選べるようにすることが大切ですし、“減らす”ということを見せずにすみます。始めから全員小盛りにしておいて、おかわりをする食べっぷりのよい友達の様子が見えるようにしたり、おかわりを促す言葉をかけたりする方法もあります。先生が食いしん坊になるのもよい方法です。



<まとめ>（成果と課題）

野口先生の「食育基本法制定後のおよそ20年間の食育は何だったのか」「コロナ時代の食育は何だったのか」との問いに、「はっ！」として始まった研修会でした。各保育現場で創意工夫して実践してきた「食育」について、本当に子どものための食育であったのか、好き嫌いをしないことや残さず食べることへの援助に重点が置かれてはいなかったかなど、改めて考えさせられました。

「子どもが頑張るのではなく、大人が工夫する」「食事に対して興味・関心が高まるような言葉がけが大切」ということを、献立名の付け方や先生が食いしん坊になる、子ども自身が食べる量を決める盛り付け方の工夫など、具体的なお話で、大学でのゼミのように質問にも丁寧にお答えいただき、明日からの保育にすぐに取り入れたいと思うことばかりでした。

教育要領・保育指針の領域「健康」に、「食べることを楽しむ」と示されていますが、基本に立ち戻り、まずは、心から「食べたい」、「美味しかった」「おなかいっぱい」「みんなと食べると楽しい」と思える「子どもにとっての食育」であるよう、各園所で改善を図っていききたいと強く思った研修会でした。野口先生、ありがとうございました。

令和5年度 全幼研ワクワクプロジェクト研修会報告
主催 公益社団法人 全国幼児教育研究協会

「遊びの中の学びを見取る
～資質・能力の発揮、伸長を支えるために～」
兵庫支部

- 実施日 令和 6年 1月 27日 (土)
時 間 8時45分～16時30分
- 会 場 神戸大学附属幼稚園
- 共 催 神戸大学附属幼稚園 幼児教育を考える研究会
- 参加者 幼稚園教諭・こども園保育教諭・保育士・大学・教育行政関係者
(会員55名 会員外89名 計144名)
- 講 師 奈良教育大学 教授 廣瀬 聡弥 氏
- 内 容
 - 1 研究会の趣旨説明
 - 2 保育参観及び記録・『学びのカード』作成
保育指導案内の『取り上げる遊び』の中から一つの遊びを選び保育参観する。参観後、記録を基に子どもが遊びの中で資質・能力を発揮、伸長している姿を『学びのカード』に記載する。・・・『学びのカード』提出
 - 3 グループ協議
参観した学年、遊びごとに編成されたグループに別れ『学びのカード』を基に、子どもの学び、学びが神戸大学附属幼稚園によって見出されたどの資質・能力の方向に向かっているか、また、学びに至った環境構成や教師の援助等の要因について協議する。協議内容を用紙にまとめると共に協議中の参加者の気づき等も随時記録する。
 - 4 全体会
学年ごとに代表の1グループが協議内容を発表し、他グループと共有する。



5 講話

演題「資質・能力を踏まえた子どもの学び」

講師 奈良教育大学 学校教育講座 教授 廣瀬 聡弥 氏

○教育・保育行動と学びについて

- ・教育・保育行動と学びについて
- ・教育とは、他の動物と違い文化的、社会的な価値を計画的に伝える営みである。その行為は、極めて想像的で創造的であり、ヒトが育ち文化や社会形成の根幹となる重要なものである。
- ・ヒトにとって「教える-教えられる」は日常的な行為である。なおかつ、保育者の何気ない行動が教育のシグナルになっている。保育者として教育・保育を行う場合は、子どもの状況から子どもの思いや学びを想像し、資質・能力を育むことが重要となる。
- ・子どもは、遊びを通して様々な資質・能力を身に付けている。しかし、身に付けたことは自覚しにくい。また、保育者からもその学びが見取りにくい。そこで、資質・能力を踏まえた共通する視点をもつことにより学びが意識され、それを分類することによって共有することが可能となる。それが多様な理解につながり、さらに学びを次の保育の広がりや深まりへの展開に役立てることができる。

○遊びの中の学びを見取るとは

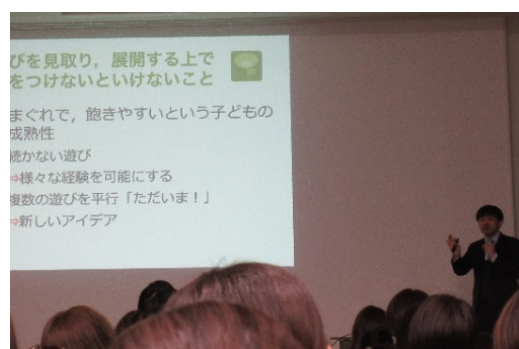
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には、資質・能力が含まれている。学びを見取る上で、気まぐれで、飽きやすいという子どもの未成熟性を理解し、続かない遊びや複数の遊びを平行することも、様々な経験や新しいアイデアが可能になると捉え大切にしていく。また、継続的に特定の子どもを見るという視点も大切である。

○保育者の関わりについて

- ・子どもと保育者は協同関係である。子どもの思い＝子どもの目標がどこにあるかを捉え、思いを大切にしながら関わり方を考えていく。

○教え⇔学ぶ 育ち合う教育・保育について

- ・主体的な教育・保育を実践している園、また子どもが面白い遊びをしている園は、子どもが遊びを教えてくれる。教え合いが文化として醸成していくことが大切である。



○まとめ（成果）

参加者一人一人が、自身の見取った学びや資質・能力について語り合うことを通し、事実を丁寧に見取り解釈する難しさを改めて実感することができた。それと共に、グループで協議することで見取った学びや資質・能力について多面的に捉えることができた。また、廣瀬先生のご講演からは、学びをしっかりと見取ることが、次の保育の広がりや深まりへの展開に役立てることができるという新たな視点を学ぶことができた。